

甲状腺外科草子 26

甲状腺の“熱い熱気”

(第39回中国四国甲状腺外科研究会の思い出)

杉野 圭三

1. 広島大学第二外科と中国四国甲状腺外科研究会

2011(平成23)年3月12日(土)に第39回中国四国甲状腺外科研究会を土谷総合病院において開催させていただきました。

第一回中国四国甲状腺外科研究会(当時、検討会)は昭和48年2月24日、桑原悟先生(鳥取大学第二外科教授)を当番世話人として開催され、広島大学第二外科では、江崎治夫名誉教授が第3回(昭和50年)、第14回(昭和61年)を主催、第21回(平成5年)を土肥雪彦名誉教授、第32回(平成16年)を浅原利正教前学長が主催されています。

教室における甲状腺外科の伝統は河石九二夫初代教授から代々受け継がれ、常に中国四国地方の中心となってきました。

今回、土谷総合病院が担当となりました。大学のような膨大なスタッフはいませんが、外科および病院スタッフの皆さまの協力もいただき円滑な運営を行うことができました。



当番世話人挨拶

会場風景

2. 地方会復古を目指して

形式にとらわれた単調な研究会に出席するのは苦痛以外の何物でもありません。今回、当番世話人の立場を最大限活用し、臨床上よく遭遇する困難症例や手術手技を中心にプログラムを編成しました。パネル1『術前診断が困難であった症例』、パネル2『治療に難渋した症例』、シンポジウム『後輩に伝授したい

甲状腺手術手技のポイント、コツ、秘技』では口演時間は7分と短いものの、ディスカッションを7分間とし、十分な討論ができるように設定しました。今回の研究会趣旨は抄録集の以下の巻頭挨拶を参照下さい。

前略

小生が甲状腺外科の道に入ったのは平成3年(1991年)で、今年で20年目となります。中国四国甲状腺外科研究会(当時、中国四国甲状腺外科検討会)に初めて参加させていただいたのが、第20回(平成4年、徳島)の研究会だったかと記憶しています。他の研究会と異なり、会場には熱い熱気(真つ白な白馬の様な表現で恐縮です)がこもり、長老から若手外科医まで早朝から熱心な討議が行われ、驚いた記憶があります。

入局したころ、先輩から言われたことがあります。『甲状腺の手術は簡単じゃー、甲状腺で死ぬ患者はおりゃーせんものじゃけー！(原文ほぼそのまま、生粋の広島弁)』。ところが、この世界に入って感じたのは「甲状腺手術はピンからキリまで様々だ」ということです。

腹部の消化器手術では多少の術後出血・oozingは問題となりませんが、頸部では「多少の出血」と楽観することはできませんし、反回神経をはじめとする神経麻痺は大きな問題です。ましてや、気管、食道、血管、縦隔まで多くの領域の複雑な術式を要求される分野です。

症例、手術を重ねるごとに、これほど簡単そうで難しい外科分野は無いと痛感します。時として、良性腫瘍では手術適応の判断に、悪性腫瘍では術式の選択に迷うことがあります。無意味な拡大手術を選択すべきではありませんし、QOLを隠れ蓑にした縮小手術は術後再発で患者を苦しめ、外科医の誇りを失墜させるものです。

地方会の良いところは、日常診療で判断に迷っている症例や珍しい症例を自由な雰囲気ですぐ意見交換できることだと思います。

後略

3. 東日本大震災、幻のピンチヒッター

今回の特別講演は福成信博先生（昭和大学横浜市北部病院外科教授）による『甲状腺腫瘍に対する最新の診断と治療』を企画し、前日の3月11日（金）広島到着予定でした。しかし、羽田空港離陸直前にあの東日本大震災に遭遇、機内で3時間足止め、さらに数時間かかり帰宅する羽目になったとのことでした。

特別講演キャンセルの絶望的状况となり、世話人会終了後ワインの酔いが回る中、夜を徹して、横目で悲惨な津波の映像を見ながら、急遽ピンチヒッター『杉野』を準備しました。しかし翌朝、羽田発最後の1座席が手に入り午前11時ごろ『奇跡の滑り込みセーフ』で到着されました。福成教授は甲状腺エコーに関する世界的権威であり、今回の講演でも最新の超音波診断技術のトピックスを御講演いただきました。



奇跡的到着の福成教授

幻のピンチヒッター杉野

4. 甲状腺の“熱い熱気”

『真っ白な白馬』、この様な重言は慎むべき冗長な文章です。しかし、甲状腺外科学会に出席するたびに感じるのは、この学会ほどディスカッションが激しく白熱し、まさに“熱い熱気”と表現したくなるような学会は他にありません。最前列やマイク周囲は長老や売り出し中の若手が占め、口演終了と同時に手が挙がりマイクの争奪戦となります。質疑応答も当然ながら辛らつで、強烈なものとなり発表者や質問者の自信、知識、ウイットが試される試練の時です。早朝から夕方まで会場に缶詰となり、2日間の会期が終了したときには心地よい脱力感と充足感が味わえます。

中国四国甲状腺外科研究会も同様に気の抜けない研究会です。その昔、桑原悟先生が一般演題で甲状腺のアポトーシスについて講演された記憶があります。古希を過ぎても衰えぬ長老の先生方の情熱に頭が下がります。



各座長を務める重鎮の世話人



左： 名誉会員土肥雪彦先生挨拶

右：原田種一名誉会員（中央）、岡本英樹先生（右）、筆者（左）

5. 甲状腺のすすめ

甲状腺手術はやればやるほど奥が深く『日暮れて道なお遠し』と感じるこの頃です。多様化する外科専門性の時代に甲状腺外科は面白い分野であり、この分野に進まれる若手・中年外科医を歓迎します。

あの東北大震災から11年が経過し、中国四国甲状腺外科研究会の世話人メンバーも大幅に変わり、原田種一先生も2018年10月21年にご逝去され寂しい限りです。思い出が風化しないうちに、2011年の広大第二外科同門会誌DOMONでの報告に写真の追加などを行い大幅に改訂しました。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2022年4月13日